

2024年 9月12日

資料館通信 第85号

ふじみ野市立 上福岡歴史民俗資料館 埼玉県ふじみ野市長宮 1-2-11 TEL 049-261-6065
大井郷土資料館 埼玉県ふじみ野市苗間40-39 (旧商工会館) TEL 049-263-3111
※展示室は旧大井村役場(苗間34-6 大井小学校東)

写真展

かこうしょう 火工廠

令和 6 年
8 月 3 日(土)～
8 月 25 日(日)

資料館では毎年、夏季に戦争と平和について考える展示を行っています。今年は、かつてふじみ野市域東部にあたる福岡村に設置された旧日本陸軍の兵器工場、通称「火工廠」の展示を開催します。市内にあった軍事施設の痕跡をたどることで、ふじみ野市における戦争・平和の歴史の意味を考える機会としました。

火工廠について

大日本印刷から市役所・上野台団地にかけての広い一帯(現 上野台一・二・三丁目及び福岡一・二丁目)には、昭和 12 年(1937)から 20 年(1945)まで操業していた「火工廠」と呼ばれた陸軍の兵器工場があった。

具体的には火薬・起爆剤や雷管(弾丸を発射するための火薬を詰めた部品)、信管(弾丸に詰められた火薬を目標命中時に爆発させる部品)、照明弾、銃弾などを製造し、太平洋戦争末期には風船爆弾の部品なども製造していた。

信号弾や砲弾信管などは他の工場から部品として運び込まれてきて、火工廠ではもっぱら火薬を詰めたり、組立てたりなどの作業が行われていた。

「火工廠」とは通称であり、正式名称は以下のとおりである。陸軍内部の組織の変化により、火工廠の名称もたびたび変わった。

昭和 11 年(1936) 9 月～

陸軍造兵廠東京工廠 福岡派出所

昭和 12 年(1937)11 月～

陸軍造兵廠東京工廠 火具製造所 福岡工場

昭和 15 年(1940) 4 月～

東京陸軍第一造兵廠 第三製造所 福岡工場

昭和 17 年(1942) 8 月～

東京陸軍第一造兵廠 川越製造所



523 号家(倉庫)付近(撮影は昭和 34 年)

現在の市役所付近から北東方向を望む。左後方に給水塔、右後方に汽缶場煙突が見える

ふじみ野市域で使われている「火工廠」の名称は、昭和 4 年(1929)～昭和 6 年(1931)年に行われた地元農家による「耕作権擁護運動」のときに使用された名称である。この時点では、陸軍造兵廠火工廠として設置計画が進められていた。この名称が戦後も通称として使われ続けているものである。

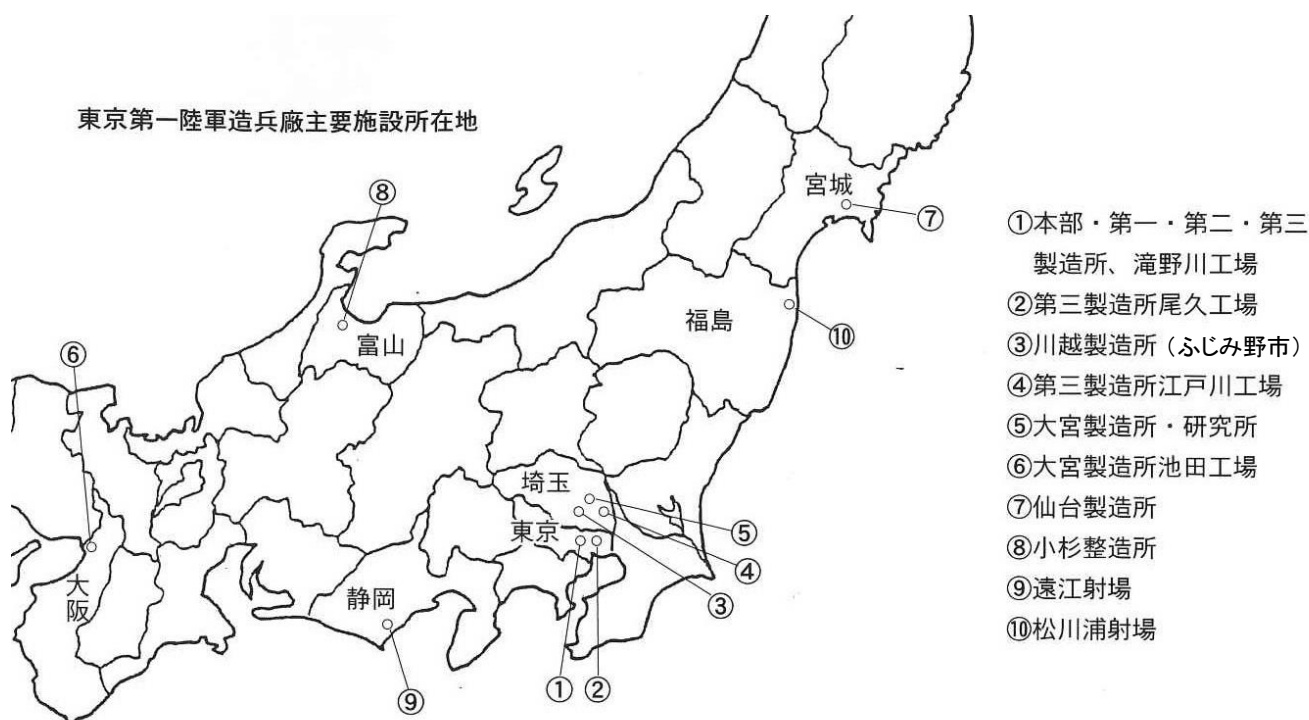
1. 火工廠が来る

「工廠」とは、一般には武器弾薬などの^{ぐんじゅ}軍需品（軍隊で使用する品物）や艦船の製造・修理を行う官営工場を意味する。

大正 12 年(1923)、陸軍は、それまで東京と大阪に分かれていた^{ほうへい}砲兵工廠を陸軍造兵廠として統合再編した。陸軍大臣に直属する陸軍造兵廠長官のもと、東京工廠・火工廠・名古屋工廠・大阪工廠の4工廠と、小倉兵器製造所・平壤兵器製造所の2兵器製造所としたのである。

火工廠の本部は東京の十条（現在の東京都北区）に置かれ、板橋・王子・目黒・岩鼻（群馬県）・宇治（京都府）の火薬製造所と十条兵器製造所を管掌した。

東京都滝野川町（現在東京都北区）には、明治 41 年(1908)に^{らいこう}雷汞場が開設された。雷汞場とは、起爆剤を製造、装填する工場である。この滝野川の工場は、大正 13 年(1924)には十条兵器製造所の所管となった。明治期より東京では都市化が進行し、北区域の軍施設付近にも宅地が増えてきた。こうしたなかで、陸軍省によって、滝野川工場の移転が計画される。



陸軍が移転先の候補として福岡村（現ふじみ野市）を挙げた理由は次のとおりである。第一に、陸軍上層部には、当初、新河岸川を使い石炭を運ぶ計画があったこと。第二に、十条の火工廠本部から車で1時間以内に到達できること。第三に、鉄道（東上線）沿線であったこと。もっとも、舟運は使われず、東上線と接続する引き込み線についても、用地は取得したものの^{ふせつ}敷設されずに終わっている。

このほかに、上福岡駅付近の場所には明治時代に陸軍の火薬庫敷地が置かれた実績があったこと、火工廠の建設予定地は、農地や山林のみで移転する農家がいなかったことも理由として考えられる。



2. 火工廠の建設

火工廠の用地は終戦時点で面積は約 55 万平方メートル(東京ドーム約 11 個分)であるが、買収は第1次から第3次にわけて行われ、工事も3回に分けて行われた。

昭和 11 年(1936)11 月 23 日、建設工事の地鎮祭^{じちん}が行われた。工事を進めるため、地元を中心に常時 600 名の^{しゅんこう}の工夫が集められた。造兵廠の竣工は1年後の 12 月 25 日とされていたので、工事は急ピッチで進められた。

翌年 12 月 25 日、開場式を迎え操業を開始した。その後、昭和 13 年(1938)から昭和 15 年(1940)にかけて用地を買収し、工場が増設された。今回の展示では、主に第1次の工事風景を収めた写真を掲示した。

3. 火工廠の建造物

火工廠敷地と外との境界には、高さ約2メートルのコンクリート塀がめぐらされていたほか、構内を外から見えないようにするため、^{へい}塀の内側に多くの樹木が植えられた。

また、火工廠では、爆発・引火の危険性のある^{だんやく}弾薬を製造していたので、製造工室や完成品を入れる倉庫などのまわりに土塁や防爆壁を築き、爆発事故が周囲に及ぶのを防ぐ対策がとられていた。

523 号家は火薬倉庫である。土塁に囲まれており、2.2 メートル×2メートル程度の土管のようなトンネルで行き来できるようになっていた。その奥には防爆壁のある建物も見える。

南門(鉄道門)は拡張前の火工廠の敷地の南限であった。ここから東上線までの線路用地が確保されており、線路の敷設予定があったためと思われ、門が建設された当時は鉄道門とも呼ばれていた。なお、後に火工廠の敷地は拡張によりさらに南に広がったため、南門の名称は辰巳門^{たつみ}(巽門)に変わっている。

180・265 号家は、高い煙突をもつ汽缶場(ボイラー室)であり、工場で使用する熱源の大半を供給していた。当時最新鋭の蒸気機関を備えていた。

117 号家は^{せんぶん}雷管撰分室である。完成した雷管を、検査掛の女性工員が良品と不良品とに分類していた。

給水塔(水槽塔)は、205 号家として位置づけられ、高さは 25 メートルあり、所内で最も高い建造物であった。平成 16 年(2004)まで上野台小学校の近くに残されていた。給水塔の下は大勢が集まれる空間となっており、朝礼が行われていたという。ここで従業員がキャッチボールや野球をすることもあった。空襲用の拡声器が全部署に聞こえるように備え付けられていた。

8号家^{ちっかなまり}(窒化鉛製造室)及び6号家^{とそう}(物置)には、日本本土空襲が激しくなった昭和 19 年末以降に施されたと思われる迷彩塗装が確認される。



6号家(物置)
(昭和 30 年代前半撮影)



8号家^{ちっかなまり}(窒化鉛製造室)
(昭和 30 年代前半撮影)

4. 発掘された火工廠

平成 16 年(2004)から平成 22 年(2010)にかけての発掘調査の結果、様々な遺構と遺物が発見された。

553 号家・577 号家(いずれも爆薬^{てんじつ}填実室。旧第2小学校跡)付近には平面図に記された水槽を確認できた。水槽からは、双眼鏡や九九式歩兵銃、銃弾、建物基礎の赤レンガなどが出土した。613 号家(信号室)付近にも水溜^{ため}があった(水溜5 G 区)。

発掘調査により、防空壕^{ごう}も複数見つっている。L 区にあった防空壕3は、655「カ」号室管薬室付近にあたる。出入口用の階段が設けられていたことが確認できる。

旧第二小学校(上野台小学校に統合)跡の防空壕内で発見された陶製手榴弾11個のうちの3個を展示した。容器は、瀬戸産、信楽産、肥前産などが認められる。



出土した陶製手榴弾



水溜5(G 区) (平成 21 年撮影)



防空壕3(L 区) (平成 21 年撮影)

5. 火工廠で働く人々

造兵廠全体の従業員数が最大で約 51,000 人で、うち十条本部と第一～第三製造所(現在の東京都北区に所在)が約 25,200 人で半数を占めていた。川越製造所(火工廠)は 4,694 人で、将校・高等官等の職員と、同所の 98%を占めていた一般工員・徴用工・動員学徒等の行員に分かれていた。動員学徒は約 1,400 人であり、福岡国民学校高等科その他の国民学校高等科や旧制中学校に通う 10 代の生徒達であった。このほかに女子挺身隊として組織された女性が動員されていた。

出勤時に入門するとき、守衛は見守るだけであるが、各自襟または胸に「門鑑」というバッジを付けていないと通過できなかった。退出する方が厳しく、官品を隠し持っていないかの検査を行っていた。検査方法は、2列や4列縦隊の集団を随時、数名ずつ選んで服装検査を行い、時には週番将校や憲兵が立会った。

勤務時間は様々であったが、一般工員の定時勤務は午前7時～午後5時であり、



神風隊(昭和 17 年頃)



造兵廠バッジ(門鑑)

夕方はいつも午後7時まで2時間の超過勤務が恒常化していた。職場によっては2交替勤務もあったし、定時で帰れるのは月に2～3回あった日曜出勤日と給料日だけであったようだ。総じて平均労働時間は 12 時間というきびしい職場であった。

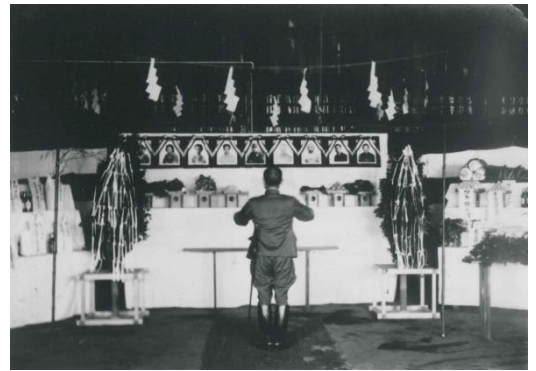
火工廠では火薬等危険な物品を取り扱う作業が多かったため、様々な形の事故が発生していた。

昭和 19 年(1944)11 月 21 日、580 号家で爆発事故が発生した。同家は、防爆壁に囲まれた爆薬填実室であった。被害者は死亡者9名(男性5名、女性4名)、負傷者6名(男性3名、女性3名)。被害者は大火傷などのため当日に5名が亡くなり、続いて4名が死亡した。死亡者9名の合同葬儀は、11 月 29 日に廠内の第三会食所(食堂)において神式にて行われた。

6. その後の火工廠

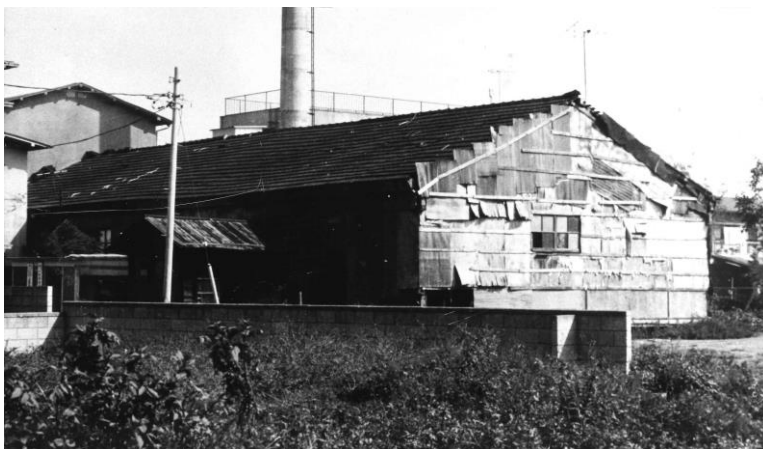
昭和 20 年(1945)8月の終戦から 10 月まで、火工廠の残務整理が、事務長と元職員により徴用工舎において進められた。徴用工舎は、三ヶ島街道(現 主要地方道さいたまふじみ野所沢線)沿いの上福岡駅付近踏切と川越街道亀久保交差点の間(※現在の^{ちやうよう}上福岡五丁目付近)にあった。11 月には陸軍省が解体され、東京第一陸軍造兵廠川越製造所も廃止、火工廠は9年余の歴史に終止符を打った。

火工廠の跡地は、昭和 20 年代半ば、朝鮮戦争の時期に一時的に弾薬生産が行われたが、昭和 30 年代から再開発がすすめられ、現在では、上野台団地、上野台小学校、福岡中学校、市役所、イオンタウンふじみ野、大日本印刷(株)や日清紡マイクロデバイス(株)、日本無線硝子(株)などの工場となっている。

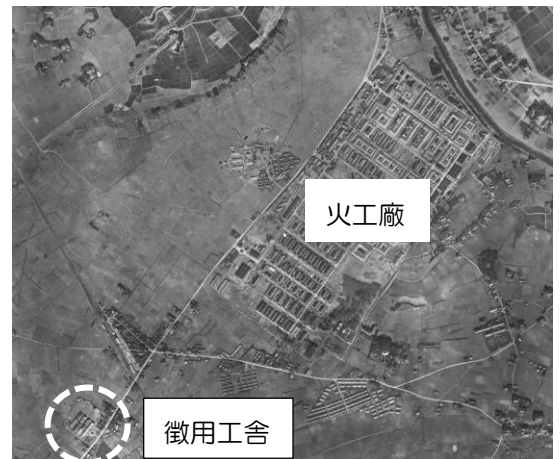


合同葬儀会場(昭和 19 年撮影)

正面後姿は川越製造所長神田大佐

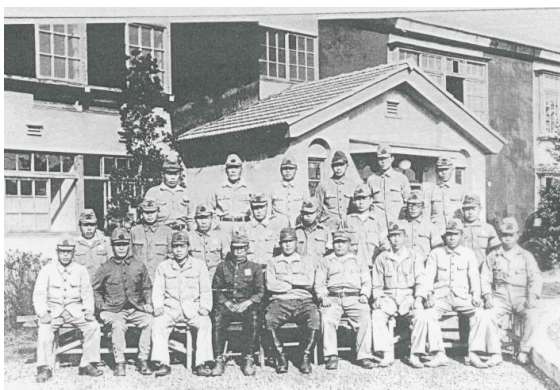


元徴用工舎(昭和 48 年撮影) 戦後直後は、沖縄、台湾、満州、南洋など海外からの引揚者を収容するために使用された。



徴用工舎の位置

(昭和 21 年撮影 国土地理院提供。一部加工)



残務処理を行っていた職員(昭和 20 年)

後方は徴用工舎



造兵廠解散式の記念碗とされる碗で将校が持っていたもの。

左側器のふたの星印が造兵廠のマーク

※造兵廠バッジ(前掲)と同じデザイン

【主な参考文献】

『旧陸軍の施設』資料館調査報告1、上福岡市歴史民俗資料館、1992年。

富田竹雄『火工廠物語』1995年。

『旧陸軍造兵廠福岡工場(川越製造所)』市史調査報告書第15集、上福岡市教育委員会、1998年。

『上福岡市史』資料編第3巻、上福岡市、1998年。

『上福岡市史』通史編下巻、上福岡市、2002年。

羽田博昭「軍工廠と地域」(上山和雄編『帝都と軍隊―地域と民衆の視点から―』)、日本経済評論社、2002年。

『東京第一陸軍造兵廠の軌跡』第22回特別展図録、ふじみ野市立上福岡歴史民俗資料館、2007年。

長南政義「日本陸軍 工廠制度の歴史」(『歴史群像』31(2))、ワン・パブリッシング、2022年。

ミニ展示「福岡東映」

福岡東映(福岡劇場)とは、福岡三丁目に昭和27年頃から40年代はじめごろまで存在していたと思われる映画館である。新資料館の展示の参考にするため情報収集を行うきっかけづくりとともにふじみ野市の近現代史にご関心をお寄せいただければと考え、ミニ展示として開催した。消防団文書の昭和34年12月から昭和36年4月まで上映された作品が仮設興行所申請書に添付されたチラシから奇跡的に判明し、昭和35年分をパネル化した。出演者には、三波春夫、高倉健、石原裕次郎、美空ひばりなど当時の著名俳優の名前がみられる。

会期;令和6年6月14日(金)～8月25日(日)まで

会場;上福岡歴史民俗資料館1階ホール右側



福岡東映の外観(昭和33年ごろ)

写真展「一丁目の夕日ふたたび」

昭和30年～令和5年にかけて上福岡駅前の街並み及び商店街が変貌を遂げてきた。例えば昭和34年から高度経済成長期の市民の炊事を支えた武州ガス上福岡工場が駅前で操業していたが、昭和51年で廃業し、昭和44年から上福岡一丁目にあった西友ストアが新上福岡店として昭和59年にその跡地に移転し、令和5年11月15日で閉店することになるなどの変化があげられる。市内で長年商店街の核店舗として昭和・平成を通じて市民に親しまれてきた西友の閉店を契機に、昭和・平成の変遷を物語る商店街や町並みの写真展を、当時の様子などを伝える資料の紹介とあわせて行った。

会期;令和5年11月18日(土)～12月17日(日)

会場;上福岡歴史民俗資料館2階ホール

※好評だったため、令和6年3月21日(木)～31日(日)にステラウェスト展示ギャラリーでも写真パネル展示のみ行った。



旧西友上福岡店(上福岡一丁目14)、左;中央公園から上福岡駅方向を望む(昭和57年ごろ)、右;上福岡銀座商店街、昭和45～47年ごろ)